

論文

# ブッダチャリタ・アンソロジー

——失われた詩を梵文三啓集写本に求めて——

松田和信

〔抄録〕

短編の阿含經典の前後にアシュヴァゴーシャ（馬鳴）作品の詩を複数配した読誦用の編集文献が「三啓（経）」である。11世紀にアティシャによってインドから将来され、チベットのポカン寺に長く保存されていた梵文写本の『三啓集』には40種の三啓経が記されている。その中には『ブッダチャリタ』や『サウンダラナンダ』といった既存のアシュヴァゴーシャ作品に加えて、断片でしか残っていなかった『舍利弗劇』あるいは現存しない『莊嚴経論』から取られた詩も多く見出される。本稿では、解説研究によって『三啓集』の中に同定されたアシュヴァゴーシャ作品詩から、ブッダの伝記『ブッダチャリタ』第14章後半以降の、これまでは失われたと思われていた50詩の梵文原典を写本から回収して和訳とともに提示する。

キーワード 馬鳴 三啓経 *Aśvagoṣa* *Buddhacarita* *Tridāṇḍamālā*

## 1 アシュヴァゴーシャのブッダチャリタ

誕生から入滅までのブッダの生涯をひとつの文献として綴った仏教聖典は存在しない。經典や律文献の中では、例えば、成道に至るまでの長い物語であったり、成道後の教団拡大の物語であったり、入滅に至る最後の数ヶ月の物語であったりといった、ブッダの生涯を彩る様々な物語がある程度まとまって、あるいは断片的に記されているだけである。それらの断片的記述を時系列に沿ってひとつにつなぐと、ブッダとなったシッダールタの一代記を著すことが可能となるが、現存文献で判断する限り、それを歴史上最初に行った人物が紀元2世紀のアシュヴァゴーシャ（*Aśvagoṣa*, 馬鳴）であった。彼は、恐らく自身が属していたであろう説一切有部教団が伝承する仏教聖典に準拠して、聖典の記述から逸脱することなく、二千を越えるカーヴィヤ調の美しい韻文（詩）によってブッダの生涯を綴った。それがサンスクリット文（梵文）によるブッダの生涯『ブッダチャリタ（*Buddhacarita*）』である。

『ブッダチャリタ』には5世紀の曇無讖による漢訳『佛所行讚』（大正192）と14世紀のチベ

ット語訳が存在するが、そのオリジナルについては、中央アジア出土のごくわずかな断簡を除いて、カトマンドゥの国立公文書館（National Archives）に保存されている梵文具葉写本がひとつあるだけで、しかもその写本は第14章「現等覚章」の中程の第32詩以降がすべて欠落した不完全な写本であった。惜しいことに、写本はシッダールタがさとりを開く直前で途切れているのである。公文書館は他に紙写本も数本所蔵しているが、いずれも不完全な貝葉写本を近代になって二次的に写したものにすぎない。現在研究者が用いている E. B. カウエルや E. H. ジョンストンの校訂本（Cowell 1893, Johnston 1935）は、この不完全な写本に基づいたもので、第14章第32詩以降の原典は失われて、もはやこの地上には存在しないものと思われてきた。ところが、現在筆者が独ミュンヘン大学のイエンス＝ウヴェ・ハルトマン（Jens-Uwe Hartmann）と解説を進めている、アシュヴァゴーシャに帰せられる『三啓集（*Tridaṇḍamālā*）』の梵文写本には、『ブツダチャリタ』の失われた詩が多く含まれている。その梵文原典を写本から読み取って明らかにすることは、後代の分かり難いチベット語訳とおよそ逐語的とは言えない漢訳でしか読むことができなかった『ブツダチャリタ』後半部の内容理解にあたって、その一部とはいえ、大きな資料を提供することになる。

## 2 三啓経と三啓集写本

すでに別稿に記したことでもあるので、ここでは簡単に述べるが、三啓（経）（*tridaṇḍa*）は、短編の阿含經典の前後にアシュヴァゴーシャ作品の詩を複数配して読誦用に編集された文献であり、その三啓経を40種まとめた文献が『三啓集（*Tridaṇḍamālā*）』である。『三啓集』の梵文写本は、チベットの仏教史上で著名なアティシャ（*Atiśa, Dīpaṃkaraśrījñāna*）によって11世紀に東インドからチベットにもたらされ、長くポカン（*sPos khang*）寺に伝えられていた。写本の現物は文革の混乱時にポカン寺では失われたとされるが、幸運なことに、1930年代にイタリアのツッチ（*Giuseppe Tucci*）によって撮影された写真、およびツッチのネガから焼かれたラーフラ・サーンクリトヤーヤナ・コレクションの写真から解説研究が可能となった。40種の三啓経のそれぞれは、最初に三帰依を含む複数詩、続く阿含経、その後置かれた複数詩という三つのダンダ（*daṇḍa*）に分割されることから「三啓（経）」と称されたと思われる。『三啓集』では11番目に記された『無常（三啓）経』（大正801および2912）を漢訳した義浄（635-713）は「ダンダ」に「啓」の語を当てていることから筆者もそれに従うが、ここで言うダンダは恐らく「セクション」を意味すると思われる。すなわち、詩－經典－詩の三つのセクションから構成される読誦文献が三啓経である<sup>(1)</sup>。

写本の奥書には『三啓集』の著者はアシュヴァゴーシャであるとはっきり書かれているが、40種の三啓経すべてがアシュヴァゴーシャ自身によって編纂されたとは断言することはできない。中にはアシュヴァゴーシャ自身によって編纂された三啓経があるのかもしれないが、多くはアシュヴァゴーシャ以降にアシュヴァゴーシャ作品から詩を借りて説一切有部教団内で編集

された読誦文献であると見なすのが妥当であろう。『三啓集』の資料的価値は、多くの阿含経が梵文で回収されること以上に、『ブッダチャリタ (*Buddhacarita*)』や『サウンダラナンダ (*Saundarananda*)』といった既存のアシュヴァゴーシャ作品に加えて、中央アジア出土の僅かな梵文断簡で残る演劇台本の『舎利弗劇 (*Śāriputraprakaraṇa*)』、あるいはカーヴィヤ調の韻文による阿含経典解釈論とみなされる、今は失われた『莊嚴経論 (*Sūtrālaṃkāra*)』の詩が多く含まれていることにある。『三啓集』には全体で凡そ1500のアシュヴァゴーシャ作品詩が含まれているが、梵文原典がすでに知られていた『ブッダチャリタ』についても、第14章第32詩以降の、既存の写本では失われていた詩が多く認められることも注目に値する。本誌前号において筆者は「アシュヴァゴーシャ・アンソロジー」と題して、『三啓集』に含まれる『莊嚴経論』から借用されたと思われる詩で、鳩摩羅什による漢訳文献中に偈形で引用、あるいは平行散文の認められる複数の詩を紹介したが (松田2022a)、本稿では『ブッダチャリタ』第14章第32詩以降の、既存の写本では失われたと思われていた詩の中から、『三啓集』に含まれる50詩を取り上げて梵文テキストと和訳を提示する。

### 3 本稿で取り上げるブッダチャリタ詩

筆者とイェンス＝ウヴェ・ハルトマンは『三啓集』写本のすべてを読み終わっているわけではない。タッチによって80年以上前に撮影された写本写真の問題から、読解困難な箇所が多く残されているからである。したがって現時点での報告ということになるが、これまでの解読研究の結果、『三啓集』の10箇所『ブッダチャリタ』(以下 Bc と略) 第14章第32詩以降の詩が確認されている。詩数およびそれが『三啓集』(以下 TDM と略) のどの箇所に含まれるかも併せて示すと以下の通りである<sup>(2)</sup>。

1. Bc 14.35–44	TDM 35.1	10詩
2. Bc 15.1–58	TDM 34.1	58詩
3. Bc 16.76, 80–89	TDM 8.1	11詩
4. Bc 16.90–93	TDM 8.3	4詩
5. Bc 18.62–78	TDM 16.1	17詩
6. Bc 19.19–22	TDM 30.3	4詩
7. Bc 20.33	TDM 9.1 & 38.1	1詩
8. Bc 24.13–45	TDM 13.3	33詩
9. Bc 26.49	TDM 40.1	1詩
10. Bc 26.60	TDM 15.3	1詩

この中で、例えば1番は『ブッダチャリタ』第14章の第35詩から第44詩までの10詩が第35三啓経の第1ダンダに見出されることを意味している。『三啓集』では、このようにある程度まと

まって『ブッダチャリタ』の詩が使われる箇所もあれば、7番、9番、10番のようにひとつの詩だけが認められる箇所もある。中には2番のように『ブッダチャリタ』第15章（初転法輪章）の58詩すべてが回収される箇所もある。これら10箇所を合計すると、発見された詩の総数は現時点では140詩である。『ブッダチャリタ』第14章第32詩以降から最終第28章までの詩の総数は980ほどであるので、14パーセントほどの失われていた梵文原典が『三啓集』から発見されたことになる。

これら10箇所のうち、2番から4番の計73詩については、筆者はすでに別稿で発表しているので<sup>(3)</sup>、本稿では5番の17詩を除く、残り50詩を取り上げる。5番は本稿では取り上げない。5番の17詩は『ブッダチャリタ』第18章に含まれる詩であるが、最近になって、イエンス＝ウヴェ・ハルトマンによって、ドイツのトルファン写本コレクション中にこの箇所と重なる写本断簡が発見され、さらに筆者も加わるノルウェーのスコイエン・コレクション研究プロジェクトのメンバーであるミュンヘン大学のグドルン・メルツァー（Gudrun Melzer）によって、スコイエン・コレクション中にこれと重なるバーミヤーン出土断簡が発見されたからである。後者は紀元5世紀に遡ると思われる東方系のグプタ・ブラーフミー文字によって貝葉に書写された資料的にも非常に貴重な断簡で、第18章の最終部分までを含む。『ブッダチャリタ』第18章のこの箇所では、ブッダがスダッタ（給孤独長者）に対して、祇園精舎の寄進に至る布施の有効性を説く有名な場面が描かれるが、17詩の梵文テキストと翻訳を公表するには、複数のヴァリエントが認められ、時代も出土地も全く異なる二つの新出断簡を併せて解読研究を行う必要があり、ハルトマンおよびメルツァーとともに別稿を期したい<sup>(4)</sup>。

なお、三啓経に用いられたアシュヴァゴーシャ作品詩は、第2ダンダに置かれた阿含経と内容的に関連する詩が選ばれており、阿含経の解説あるいは讃歎を意図してそこに置かれたものと思われる。したがって本稿で取り上げる『ブッダチャリタ』の詩も、それが置かれた第2ダンダの阿含経との関係を明らかにする必要があるが、それについては今後各三啓経の梵文テキストと翻訳を出版する際の論攷に譲る<sup>(5)</sup>。

#### 4 梵文テキストと和訳

上記一覧で示した1番の10詩、6番の4詩、7番の1詩、8番の33詩、9番と10番の各1詩の計50詩を取り上げて梵文テキストと和訳を提示する<sup>(6)</sup>。梵文テキストの作成に当たっては、写本に一般的に見られる書写生の書き癖や些細な誤写はすべて正規形に戻したが、いちいち注記しない。ただし内容理解を左右すると思われる写本の修正については注記する。代用アヌスヴァーラもすべて断りなく修正した。テキスト中に用いた括弧については、写本写真の状態から明確には確定できない文字を [ ] で、書写生が書き忘れた文字を 〈 〉 で、欄外に後で書かれた文字を « » で示した。チベット語訳については、イエンス＝ウヴェ・ハルトマンから提供されたローランド・シュタイナー（Roland Steiner）の校訂本（未出版）と第17章までのヴェ

ラーの校訂本 (Weller 1928) を参照した。第14章後半以降のチベット語訳からのジョンストンの英訳 (Johnston 1936a, 1936b)、および最近講談社学術文庫に収められた梶山雄一博士・御牧克己博士らの和訳も無論参照した<sup>(7)</sup>。

### (1) Bc 14.35-44 天界観察

最初は第35三啓経の第1ダンダに現れる『ブツダチャリタ』第14章の10詩である (Ms. 98v1-3)。第14章ではシッダールタの成道が描かれるが、まずシッダールタは地獄、畜生、餓鬼、人、天の五趣を順番に観察して成道へと進んでゆく。この10詩は最後に観察する天界の全文にあたり、善業を積んで得られる天界といえども輪廻の内にある無常なる境界であることがシッダールタの独白として述べられる。既存の校訂本が基づいた梵文写本では第14章第32詩以降が失われていたが、そのわずか4詩目からの計10詩が第35三啓経に含まれ、その梵文原典が明らかとなったのである。韻律はすべて *Anuṣṭubh* である。

ime 'nye<sup>(8)</sup> karmabhiḥ puṇyair upapannās tripiṣṭape |  
agnineva pradahyante kāmarāgāgninā bhṛṣam || Bc 14.35 ||

善業 (puṇya- karman) によって天界 (tripiṣṭapa) に生まれた他の者たちは、火に〔焼かれる〕ように、欲望の対象 (kāma) [の天女たち] に対する淫欲 (rāga) の火によって烈しく焼かれる。

atrptā eva viṣayair yasmād ete hatatviṣaḥ |  
parimlāna[srajo dī](98v2)nā nipatanty ūrdhvacakṣuṣaḥ || Bc 14.36 ||

彼らは決して対象 (viṣaya) に満足することなく、輝き (tviṣ) を失い、しおれた華鬘 (sraj) をつけたまま、苦しうに (dīna) 目を上にやりながらそこ (天界) から墜落してゆく。

amūr apsaraso yatra patantam avaśaṃ priyam |  
karair gr̥hṇanti vastrānte hr̥di snigdhair avekṣitaiḥ || Bc 14.37 ||

そこでは、それら天女 (apsaras) たちが力なく墜落してゆく愛人 (priya) の着物の端を手で捕まえ、〔愛人の〕心 (hr̥d) を情愛深い (sunigdha) 視線 (avekṣita)<sup>(9)</sup>で〔捕まえている〕。

vimānebhyaḥ sakaruṇaṃ paśyantyaḥ patataḥ priyān |  
alaṃkāranatair gātrair yāḥ patantīva medinīm || Bc 14.38 ||

あたかも装飾品 (alaṃkāra) [の重み] で曲がった肢体 (gātra) のせいで〔自分たちが〕地面 (medinī) に墜落してゆくかのように、宮殿 (vimāna) から〔身を乗り出して〕墜落してゆく愛人たちを憐んで見つめながら。

amūr anyāḥ priyān bhraṣṭān vikṣiptābharaṇasrajaḥ |  
saṃtaptāḥ sneha[caṭulair] anugacchanti locanaiḥ || Bc 14.39 ||

別の〔天女〕たちは、苦しみに陥って (saṃtapta) 装飾 (ābharāṇa) と華鬘 (sraja) を投げ散らかし、愛情に揺れる目で墜落していった愛人たちを追いかけてゆく。

(98v3) karair urāṃsi nighnantyo bhraṣyamāneṣu kāmīṣu |  
 ārtim<sup>(10)</sup> mahākulasyeva darśayanty apsarogaṇāḥ || Bc 14.40 ||

愛人 (kāmin) たちが墜落してゆく時、天女の群れは手 (kara) で胸 (uras) を叩きつつ、あたかも大混乱 (mahā-ākula) に〔陥った〕人〔が苦しみをみせる〕ように、苦しみ (ārti) を見せている。

hā caitraratha hā vāpi hā mandākini hā priye |  
 ity evaṃ vilapanto hi gāṃ patati divaukaṣaḥ || Bc 14.41<sup>(11)</sup> ||

「ああ、〔天界の〕チャイトララタ〔の森〕よ、ああ、〔天界の〕湖 (vāpī) よ、ああ、〔天界の〕マNDERキニー〔河〕よ、ああ、〔愛しい〕女 (kanyā) よ」と、このように嘆きつつ、天界にいた者 (divaukaṣa) たちは地上 (go) に墜落してゆく。

karmabhir bahubhir labdhaṃ dhik svargaṃ calam adhruvam |  
 viprayogakṛtaṃ duḥkhaṃ yatredṛṣa[m avāpyate] || Bc 14.42 ||

多くの〔善〕業によって得られた天界も、ああ、移ろい (cala)、不堅固 (adhruva) なものであり、そこでは別離 (viprayoga) によって作られたこのような苦しみが得られるのだ。

aho khalu viśeṣeṇa (98v4) lokasya kṣayadharmatā |  
 vairāgyam api hi prāpya nipatanty apare divaḥ || Bc 14.43 ||

ああ、世間には殊更に滅亡の性質 (kṣayadharmatā) があるのだ。たとえ他の者たちが離欲 (vairāgya) を得て〔それより上界に行っても〕も、天界 (div) から墜落してゆくのだ。

sanātanam idaṃ sthānam iti niścītacetasaḥ |  
 asya lokasya nādrākṣuḥ svabhāvam idaṃ īdṛṣam || Bc 14.44 ||

「〔天界の〕この地位 (sthāna) は永遠だ (sanātana)。」と思い込んだ人々 (niścītacetasa) は、〔天界を含む〕この世間のそのような本質 (svabhāva) を理解していなかったのだ。

## (6) Bc 19.19-22 浄飯王への教誡

ブッダとなったシッダールタはやがて故郷のカピラヴァストゥ (Kapilavastu) を訪問して、父の浄飯 (Śuddhodana) 王に教えを説く。『ブッダチャリタ』第19章ではそれが12詩で描かれる。その中核をなす4詩が第30三啓経の第3ダンダに使われている (Ms. 83r2-4)。業 (karman) と輪廻の仕組みが語られるが、教義研究の点からも重要な4詩である。ただ、内容を理解することは難しい。言葉を補って和訳した。韻律は4詩とも Upajāti である。

karmātmakaṃ pārthiva karmayoni  
karmāśrayaṃ karmavi(83r1)pākabhāgi<sup>(12)</sup> |  
jñātvā jagat karmavaśena tiṣṭhat  
sevasva tat karma hitaṃ hi yat syāt || Bc 19.19 ||

王よ、世間〔の人々〕は業（karman）を本質とし、〔未来世を生む〕業の母胎（yoni）を持ち、〔現在世の〕業のよりどころ（āśraya）を持ち、〔過去世の〕業の異熟（karmavipāka）という分け前を受け取り（bhāgin）、〔過去世の〕業の力（karmavaśa）によって〔現世に〕とどまっていることを知って、〔来世の〕利益となるような業を行いなさい。

vimṛṣya cānviṣya ca lokatattvaṃ  
mitraṃ hi satkarma narasya nānyat |  
hitvāpi sarvaṃ saha karmaṇā te  
gantavyam ekena nirāśrayeṇa || Bc 19.20 ||

世間〔の人々〕の真実を観察し、探求すれば、人にとって善業（satskarman）こそ朋友（mitra）であって、それ以外はそうではありません。〔あなたは現在世で〕すべてを棄てても、あなたの業を伴って、ひとりよりどころもなく〔来世に〕行かなければなりません。

tiryā[nṛ]lokaṃ naraṃ divaṃ vā  
karmāśrayād ga[cchati] jīvalokaḥ |  
tṛṣṇānidānaṃ trividhaṃ triyoni  
loko (83r2) hi citraṃ prakaroti karma || Bc 19.21 ||

業をよりどころ（āśraya）として、生類の世間（jīvaloka）は〔来世に〕畜生界、人間界、地獄、あるいは天〔界〕に行くのです。実に生類の世間は、渴愛を因とし（tṛṣṇānidāna）、〔身口意の〕三種からなり、三つの〔業の果報の〕母胎（yoni）となる様々な業を作るのです。

tasmād yathāśakti viśṛṣṭaye «ca»  
vāgdehayoḥ karmaviśuddhaye ca |  
ghaṭasva cittasya<sup>(13)</sup> samādhaye ca  
svakāryam etat parakāryam etat || Bc 19.22 ||

それ故に、力の及ぶ限り〔渴愛を〕放棄することと、言葉（vāc, 口）とからだ（deha, 身）の業の浄化と、心（citta, 意）の集中（samādhi）に努めなさい。〔自分が作った〕その〔業〕は自分に結果するものであって、〔他人が作った〕その〔業〕は他人に結果するものなのです<sup>(14)</sup>。

#### (7) Bc 20.33 波斯匿王への教誡

『ブッダチャリタ』第20章では、スダッタから寄進を受けたシュラーヴァステー（Śrāvastī）の祇園精舎（Jetavana）において、当地のプラセーナジット（Prasenajit, 波斯匿）王にブッダが初めて教えを説く。全部で39詩によって描かれる教えの中から、1詩だけが2度、第9三啓経

の第1ダンダ（Ms. 17v2）と第38三啓経の第1ダンダ（Ms. 106r3-4）に使われている。二つの三啓経には共通の詩が多く認められるが、これもその一つである。両者は完全に同一で、ヴァリエーションは認められない。韻律は Upajāti である。

tasmād anitye sati jīvaloke  
vidyuccalāyāṃ viṣayappravṛttau |  
nārhasy adharmeṇa phalāni bhoktuṃ  
mṛtyoḥ karāgre parivartamānaḥ || Bc 20.33<sup>(15)</sup> ||

それゆえ、生類の世間（jīvaloka）が無常であるにもかかわらず、稲妻のように移ろいやすい（vidyutcala）〔感官の〕対象（viṣaya）の生起する（pravṛtti）時、死神（mṛtyu）の手の先で振る舞っているあなたは、非法〔の行い〕（adharmā）によって〔苦しい〕結果を受け取るべきではありません。

#### (8) Bc 24.13-45 アーナンダとリッチャヴィの人々への教誡

前章（第23章）の最後のところで、ブッダは悪魔の提案を受け入れて寿命を捨てる決心をするが、それを受けて『ブッダチャリタ』第24章では、嘆くアーナンダとあわてて駆けつけてきたリッチャヴィ（Ricchavi）の人々にブッダが教誡を説く。第13三啓経の第3ダンダにはそのほとんどの詩が組み込まれている（Ms. 26v2-27v2）。全部で33詩ある。韻律はすべて Anuṣṭubh である。この中には、所謂「自灯明・法灯明」の教誡が第21-23詩に示され、さらに第24-30詩では、身・受・心・法（第28詩では法に代えて蘊）の四念処（四念住）が説かれるが、それが仏教の修行道の根幹をなしていることが分かる。6番と同様、教義研究の点からも重要な詩が並んでいる。なお第31詩からは、場面はリッチャヴィの人々への教誡に変わる。第13三啓経の第2ダンダの阿含経はシャーリプトラ（舎利弗）の死とアーナンダの対応を語る『雑阿含』638経（大正2巻176b-177a）であり、638経でもブッダはアーナンダに「自灯明・法灯明」の教誡を説いている。第2ダンダの阿含経と、その前後に配されたアシュヴァゴーシャ作品詩が内容的に対応することを示す分かりやすい一例である。

tato dṛṣṭvā tathānandaṃ śokavyathi(26v3)tamānasam |  
babhāṣe sāntvayan<sup>(16)</sup> nāthas tattvaṃ tattvavidāṃ varaḥ || Bc 24.13 ||

そこで、そのように悲しみに震えた心をしたアーナンダを見て、真実を知る者たちの最上者にして保護者〔であるブッダ〕は〔アーナンダを〕なだめつつ真実を語った。

svabhāvaṃ jagato jñātvā śokam ānanda mā kṛthāḥ |  
īdṛśāḥ saṃskṛtā bhāvāḥ kṣeṣṇu<sup>(17)</sup> sarvaṃ idaṃ jagat || Bc 24.14 ||

「アーナンダよ、世間〔の人々〕の本性を知って、悲しんではなりません。作られた（有為の）もの（bhāva）はそのようなものであり、この世間〔の人々〕はすべて滅するのです。



pūrvam eva mayoktaṃ te dvaṃdvārāmeṣu jantuṣu |  
priyaiḥ sarvair vinābhāvas tṛṣṇā saṃkṣipyatām iti || Bc 24.15 ||

以前、私はあなたに言いました。「カップル (dvaṃdva) [になること] を喜ぶ (ārāma) 生類 (jantu) において、すべての愛する者たちとの別れがある。渴愛 (tṛṣṇā) を捨てよ。」と。

na hi śakyam idaṃ labdhuṃ yaj jātaṃ saṃskṛtaṃ calam |  
pratītyotpannam avaśaṃ (26v4) tan me nityaṃ bhavatv iti || Bc 24.16 ||

生じたもの (jāta) であり、作られたもの (saṃskṛta) であり、移ろうもの (cala) であり、縁によって生じたもの (pratītyotpanna) であり、自存しないもの (avaśa) が「私には常なるもの (nitya) であるべきだ」という、この [ような考え] を得ることはできません。

yadi bhūtaṃ bhaven nityaṃ pravṛttir na bhavec calā |  
kasya mokṣeṇa kṛtyaṃ syād ato naiṣṭhikam iṣyate<sup>(18)</sup> || Bc 24.17 ||

もし生類 (bhūta) が常なるもので、[生類の] 生起が揺れ動くものでないならば、誰に解脱 (mokṣa) が必要とされるのでしょうか。だから [生類は] 至高のものとして望まれるのです。

atha vā tvaṃ jano vānyaḥ kim āśāste mamāntikāt |  
yato jāto 'yam āyāso madvīyogakṛtas tava || Bc 24.18 ||

さらにまた、あなたや他の人たち (jana) は、私から何を期待しているのでしょうか。私との別離によって、あなたにこのような苦惱 (āyāsa) が生じるとは。

deśīto vo mayā mārgaḥ kṛtsno vivṛta eva ca |  
ācāryamuṣṭir na hy asti buddhānām iti gṛhyatām || Bc 24.19 ||

私はあなた方に道 (mārga) を説き、すべて公開しました (vivṛta)。もろもろのブツダには師の教え惜しみ (ācāryamuṣṭi, 師拳) はないと理解すべきです。

(26v5) sthite mayy upaśānte vā kāryam etāvad eva tu |  
ko 'rtho vo maccharīreṇa dharmakāyās tathāgatāḥ || Bc 24.20 ||

私が [この世に] とどまっても寂滅しても、[私によって] なされるべきこと (kārya) はこれだけ (道を説くことだけ) であったのです。あなた方にとって私の身体に何の意味があるでしょう。もろもろの如来は法 (ダルマ) を身体としている (dharmakāya) のです。

saṃvignais tatparais tasmād adhunā mama cātyayāt |  
ātmadvīpair vihartavyaṃ dharmadvīpaiś ca nityaśaḥ || Bc 24.21 ||

だから、現在も、私が滅度してからも、恐れを抱き、それに専らとなった [あなた方は] 絶えず自分を島 (dvīpa, 避難所) として住すべきです。法 (ダルマ) を島として [住すべきです。]

ātmadvīpā iti jñeyās tatparā dṛḍhavikramāḥ |

nirdvaṃdvāḥ kuśalair dharmair na parāyatabuddhayaḥ || Bc 24.22 ||

「自分を鳥（避難所）とする人」とは、それに専念し、堅固な歩みを持ち、善なる法（ダルマ）によって争いを離れた人（nirdvaṃdva）であり、他の人々に依存した認識を持つ人ではないと知るべきです。

dharmadvīpāḥ punar jñeyā (27r1) vidyāvanto vipaścitaḥ |  
dīptayā prajñayā ghnanti pradīpeneva ye tamaḥ || Bc 24.23 ||

さらに「法を鳥とする人」とは、明知をそなえ（vidyāvat）、智者（vipaścit）であり、灯火（pradīpa）によって〔闇を破る〕ように、燃え立つ（dīpta）智慧（prajñā）によって〔無知の〕闇（tamas）を破る人であると知るべきです。

catvāro gocarās teṣāṃ śreyasām upalabdhaye |  
śārīraṃ vedanā caiva cittaṃ nairātmyam eva ca || Bc 24.24 ||

それら〔自分を鳥とし、法を鳥とする〕者たちには、〔四つの〕至福（śreyas）を得るために、身体（śārīra）と受（vedanā）と心（citta）と無我（nairātmya）という、四つの〔観察〕対象（gocara）があるのです。

tvagasthirudhirasnāyumāṃsaśleṣmādibhir<sup>(19)</sup> vṛtam |  
paśyann aśucitaḥ kāyaṃ śārīre na hi rajyate || Bc 24.25 ||

〔1. 身体=不浄〕皮膚（tvac）や骨（asthi）や血（rudhira）や筋（snāyu）や肉（māṃsa）や痰（śleṣman）などによって覆われた身体（kāya）を不浄として見ている人は身体（śārīra）に執着することはありません。

pratyaair vartamānāsu vedanāsu tathā tathā |  
paśyato duḥkham ity e(27r2)vaṃ sukhasaṃjñā prahīyate || Bc 24.26 ||

〔2. 受=不楽〕様々に縁によって起こる諸々の受（vedanā）に対して「苦である」とこのように見ている人には、安楽の想（sukhasaṃjñā）は断ぜられます。

utpādaṃ ca sthitiṃ caiva cittasya vyayam eva ca |  
paśyataḥ śāntamanaso nityagrāho nivartate || Bc 24.27 ||

〔3. 心=無常〕心の生（utpāda）と住（stḥiti）と滅（vyaya）を見ている寂靜の心持てる人には、常住であるという執着（nityagrāha）は消え去ります。

pratyaebhyaḥ samutpannān skan«dhā»n samanupaśyataḥ |  
ahaṃkārasya janako nātmaḡrāhaḥ pravartate || Bc 24.28 ||

〔4. 蘊=無我〕諸々の蘊が諸々の縁から生じたものであると観察している人には、我見（ahaṃkāra）を生む（janaka）アートマンがあるという執着（ātmaḡrāha）は起こりません。

iti smṛtim upasthāpya caturṣv eteṣu vastuṣu |  
mārga ekāyano hy eṣa duḥkhānām upaśāntaye || Bc 24.29 ||

このように、苦の寂滅のためにはこれが唯一の道 (ekāyana-mārga, 一向道) であり、これら四つのことから (vastu) に念 (smṛti) を固定させて、

ye hy a(27r3)tra vihariṣyanti sāmpratam mama cātyayāt |  
niḥśreyasam avāpsyanti te padaṃ param acyutam || Bc 24.30 ||

→ 現在も (sāmpratam)、私が滅度した後も、そこにとどまる者たちは、至福で (niḥśreyas) 究極にして (para) 不死の (acyuta) 処 (pada) を得ることになるでしょう。」

ity ānandāya tām caiva kathāṃ cakre vināyakaḥ |  
śrutvā licchava(ya)ś caiva tadbhāvād drutam abhyayaḥ || Bc 24.31 ||

以上、導師 (ブツダ) はアーナンダにこの話をされた。また、リッチャヴィの人々が [ブツダの入滅の決意を] 聞きつけて、彼 (ブツダ) に対する心情 (bhāva) から急いでやって来た。

muneḥ premṇā ca bhaktyā ca saṃtā«pā»hṛtacetasaḥ |  
vṛttāntanyastasarvārthāḥ sambhramād ujjhitarddhayaḥ || Bc 24.32 ||

牟尼に対する愛情 (preman) と敬愛の心 (bhakti) ゆえ、苦しみに心打たれ、事の成り行き (vṛttānta) によってすべての関心事 (artha) を取りやめ、混乱に陥って繁栄 (ṛddhi) を捨て、

praṇipatyopaviviṣuḥ śāstā(27r4)raṃ «te» vivakṣavaḥ |  
vivakṣūms tāmś ca vijñāya munir vākyam uvāca ha || Bc 24.33 ||

→ 師に話したいと欲した彼ら (リッチャヴィの人々は) は、ひれ伏して座についた。彼らが話したがっているのを知って、牟尼は [次のように] 言葉を語った。

yo 'yam asmadgato bhāvaḥ sarvam etam avaimi vaḥ |  
pratibhānti hi dainyaena ta evānya ivādyā me || Bc 24.34 ||

[私についての (asmadgata) あなた方の (vas) 心情 (bhāva)、そのすべてを私は分かります。なぜなら [あなた方の] 落胆した表情 (dainya) によって、今日、私にはその同じ [あなた方] が別の人々のように見えるからです。

sarvathā caiva yuṣmābhis tiṣṭhadbhiḥ śrīśukheṣv api |  
anenābhīniveśena vyañjitā dharmāśauṇḍatā || Bc 24.35 ||

また、すべてにわたってあなた方は [世俗的な] 繁栄の安楽 (śrīśukha) に立っているのに、[私に対する] その愛着 (abhīniveśa) から、[世間を超えた] 法 (ダルマ) に夢中であること (śauṇḍatā) が示されました。

yadi tu jñeyam asmattaḥ śrutam jñātañ ca kiñcana |  
(27r5) ma[tśā]ntiṃ prati saṃtāpaṃ mā kārṣṭa vrajāta sthitim || Bc 24.36 ||

しかし、もし私〔の説いたこと〕から理解されるべきことが、〔あなた方に〕多少なりとも聞かれたり知られているなら、私の寂滅 (śānti, 死) に対して苦悩してはなりません。〔心の〕安定 (sthitim) に向かいなさい。

anityāḥ saṃskṛtā dharmāś calā vipariṇāminaḥ |  
niḥsārās cāpy aviśvāsyā nāsti kācit sthirā sthitiḥ || Bc 24.37 ||

作られたもの (有為法) は無常であり、移ろい、変壊し、芯がなく (niḥsāra)、信頼に足るものではなく (aviśvāsyā)、〔作られたものには〕如何なる確固たる安定性 (sthitim) もありません。

vasiṣṭhātriprabhṛtayo<sup>(20)</sup> ye cānye 'py ūrdhvaretasaḥ |  
kālasya vaśam ājagmur bhavasyaiśā durantatā || Bc 24.38 ||

ヴァシシュタ〔仙〕(Vasiṣṭha) やアトリ〔仙〕(Atri) なども、また他の禁欲者 (ūrdhvaretas) たちも、時の支配下に趣きました。〔輪廻の〕生存 (bhava) にはこの不幸な結末 (durantatā) があるのです。

māndhātā pṛthivīdhātā<sup>(21)</sup> śakropamavasur vasuḥ |  
mahābhāgo (27v1) 'tha nābhāgaḥ<sup>(22)</sup> sambhūto bhūtavatsalaḥ || Bc 24.39 ||

大地の保護者であるマーンダートリ〔王〕、インドラの如き富 (vasu) 持てるヴァス〔王〕、大いなる分け前 (bhāga) 持てるナーバーガ〔王〕、生類 (bhūta) を愛する (vatsala) サンブータ〔王〕 ↓

yayātir atha śayyātīḥ suratho 'tha bhagīrathaḥ |  
purukutsaḥ purū rājā rāmo rājir ajo rajaḥ || Bc 24.40 ||

↓ さらにまた、ヤヤーティ〔王〕、シャヤーティ〔王〕、スラタ〔王〕、バギーラタ〔王〕、プルクトサ〔王〕、プル (Puru) 王<sup>(23)</sup>、ラーマ〔王〕、ラージ〔王〕、アジャ〔王〕、ラジャ〔王〕 ↓

ete cānye ca bahavo mahātmāno<sup>(24)</sup> nr̥parṣayaḥ |  
mahendrasadr̥śā neśur avināśi na vidyate || Bc 24.41 ||

↓ 彼らや、偉大なるインドラに似た他の多くの偉大なる王 (nr̥pa) や聖仙 (r̥si) たちも滅びました。不滅のもの (avināśin) など存在しません<sup>(25)</sup>。

sthānād acyuta<sup>(26)</sup> āditye vasavo vasudhām yayuḥ |  
atīyuh śataśaś cendrāḥ śāśvataṃ nāsti kiñcana || Bc 24.42 ||

太陽がまだ座から没してもいないのに、ヴァス〔神群〕は地に落ちました。神 (indra) たち

も幾百度と過ぎ去ってゆきました。永遠のもの (śāśvata) は決してありません。

samya(27v2)gbuddhās ca ye 'py anye babhūvus te 'pi nirvavuh |  
ālokaṃ jagataḥ kṛtvā dīpāḥ snehakṣayād iva || Bc 24.43 ||

また別の〔過去の〕正覚者たちも、世間〔の人々〕に光 (āloka) を作ってから入滅してゆきました。あたかも油の尽きることから灯明 (dīpa) が〔滅するよう。〕

ye caivānye kṛtātmāno bhaviṣyanti tathāgatāḥ |  
te pi nirvṛtim eṣyanti dagdhendhana ivānalaḥ || Bc 24.44 ||

また誕生するであろう別の偉大な〔未来の〕如来たちも滅 (nirvṛti) に向かうでしょう。あたかも薪の燃え尽きた火が〔滅に向かうよう。〕

ato 'ham api yāsyāmi mumukṣur imam āśrayam |  
anartham dehasamjñam me voḍhum na hy asti kāraṇam || Bc 24.45 ||

だから、このよりどころ (āśraya, 身体) を捨てたいと欲する〔現在の〕私も去ってゆくでしょう。身体 (deha) と称される無意味なものを運んで行くべき理由は私にはありません<sup>(27)</sup>。』

#### (9) (10) Bc 26.49, 26.60 沙羅双樹の下での教誡

『ブツダチャリタ』第26章では、クシナガラ近くのひとつがいの沙羅の木 (沙羅双樹) の間に臥して、いよいよ涅槃に入ろうとするブツダが周りを取り囲んだ者たちに語りかける。詩は50詩ほど費やされるが、第40三啓経の第1ダンダ (Ms. 112v5) と第15三啓経の第3ダンダ (Ms. 32r5) では、それら50詩から詩がひとつづつ取られて置かれている。韻律は2詩とも Upajāti である。なお、第15三啓経に含まれる後者 (Bc 26.60) は後代の *Mṛtyuvañcanopadeśa* の詩と同じであるが、それについてはこの後で触れる。

dharmasya bhettā yaśaso vihanā  
rūpasya śatruḥ hṛdayasya vahniḥ |  
krodhāya tasmai prasaro [na de]yo  
vairī guṇānāṃ na hi tādrśo 'nyaḥ || Bc 26.49<sup>(28)</sup> ||

法 (ダルマ) の破断者 (bhetṭr) であり、名声の破壊者 (vihanṭr) であり、美しさ (rūpa) の敵 (śatru) であり、心中の火 (vahni) である怒り (krodha) に勢い (prasara) を与えてはなりません。なぜなら、もろもろの徳性 (guṇa) に対する、そのような敵 (vairin) はそれ (怒り) 以外にないのですから<sup>(29)</sup>。

na duṣkaraṃ kiñcana vikrameṇa  
tasmād anikṣiptadhurā ghaṭadhvam |  
nityapravṛttā hi bhinatti kāle  
śīlātalaṃ mṛdvy api vāridhārā || Bc 26.60 ||

勇気（vikrama）があればいかなる困難（duṣkara）もありません。だからあなた方は休まずに（anikṣiptadhura）努力しなさい。実に、常に流れる（nityapravṛtta）柔らかい水流（mṛdvī vāridhārā）でも、早晚（kāle）岩の表面（śilātala）を穿つのですから<sup>(30)</sup>。

## 5 失われた莊嚴経論の可能性

本稿では『ブッダチャリタ』第14章第32詩以降の失われていた詩の中から、50詩を『三啓集』から回収して提示した。『ブッダチャリタ』のチベット語訳と比較しても、これらの50詩がすべて『ブッダチャリタ』の詩と同一詩であることは疑いようがない。例えば、8番の33詩はアーナンダとリッチャヴィの人々への教誡を説くが、その中には教誡の言葉だけでなく、詩による地の文も含まれている。ストーリー展開のための説明文を含むわけであるから、8番の33詩が『ブッダチャリタ』第24章に説かれるエピソードから借用されて三啓経に組み込まれたことは間違いないであろう。ただし『三啓集』では、これらの詩が元は『ブッダチャリタ』の詩であるなどと書かれているわけではない。さらに、7、9、10番では、それぞれ1詩が認められるだけである。三啓経の編者は『ブッダチャリタ』の各所からひとつづつ詩を借用したのであろうか。この点については疑問がないわけではない。この三つの詩が含まれる三啓経には未同定の多くの詩が含まれ、その中の1詩だけが『ブッダチャリタ』の詩に一致するのである。これは奇妙な事実ではある。

このような疑念を考える上で、近年ひとつの梵文資料が明らかとなった。ヨハネス・シュナイダー（Johannes Schneider）によって2010年に校訂テキストが刊行された *Mṛtyuvañcanopadeśa* がそれである。著者のヴァーギーシュヴァラキールティ（Vāgīśvarakīrti）はヴィクラマシーラ僧院の六門の一人に数えられる人物である。これは相当後代の文献であるが、全編韻文で著され、そのほとんどは Anuṣṭubh 調の詩であるが、中には異なる韻律の詩も含まれている。その最終章の第4章は102詩から構成されるが、第92-93詩は韻律が Anuṣṭubh 調から Upajāti 調と Śālinī 調に変わる。梵文テキストを校訂本から引用すると次の通りである（Schneider 2010:119）。第93詩のみ和訳を添える。

na duṣkaraṃ kiṃcana vikrameṇa  
tasmād anikṣiptadhurā yatadhvam  
nityapravṛttā vibhinatti kāle  
śilātalaṃ mṛdv api vāridhārā || 4.92 || Upajāti

kāṣṭhād agnir jāyate mathyamānād  
bhūmis toyaṃ khanyamānā dadāti |  
sotsāhānām nāsty asādhyam narāṇam  
nyāyārbdhāḥ sarvayatnāḥ phalanti || 4.93 || Śālinī

摩擦される木片から火が生じ、掘り返される大地が水を与える〔ように〕、努力を重ねる

者たちに成就しないものはない。正しく開始されたすべての努力は実を結ぶのである。

この2詩のうち、一部にヴァリエントは認められるが、最初の第92詩は本稿の10番で取り上げた『ブッダチャリタ』第26章第60詩そのものである<sup>(31)</sup>。ヴァーギーシュヴァラキールティは『ブッダチャリタ』の詩を自身の著作に借用したのであろうか。次の第93詩は『ブッダチャリタ』の詩ではない。しかし、この詩は筆者には見覚えがある。

『三啓集』を紹介した筆者の1号論文の中で、筆者は第15三啓経の第3ダンダに含まれる精進を説く一連の六つの詩（第3ダンダ第1-第6詩）を紹介したが、その中の6番目がこの詩に他ならない（松田2019:7-8）。この詩にも一部にヴァリエントが認められるが<sup>(32)</sup>、第15三啓経の第3ダンダに含まれる詩と同じ詩が *Mrtyuvañcanopadeśa* でも、しかも『ブッダチャリタ』第26章第60詩に連続して現れるのである。筆者は第15三啓経の六つの詩が鳩摩羅什訳の『大智度論』に「讚精進偈」として引用されていることも指摘し、それらが元はアシュヴァゴーシャの失われた『莊嚴経論 (*Sūtrālamkāra*)』の詩であった可能性があることを述べた<sup>(33)</sup>。さらに、1号論文を書いた時点では気づいていなかったが、『ブッダチャリタ』第26章第60詩も同じ第15三啓経第3ダンダの中で、六つの詩に続く詩群の中に見出されるのである。第15三啓経の第3ダンダには全部で14詩が含まれるが、これはその中の第11詩である。一覧表にまとめよう。

<i>Mrtyuvañcanopadeśa</i>	TDM 15, 3rd daṇḍa	<i>Buddhacarita</i>	大智度論の引用
4.92	⇒ No. 11	⇒ 26.60	×
4.93	⇒ No. 6	×	○

仮に *Mrtyuvañcanopadeśa* の第4章第93詩が元は『莊嚴経論』の詩であったとすると、ヴァーギーシュヴァラキールティは、第4章第92詩を『ブッダチャリタ』から借用し、それに続く第93詩を『莊嚴経論』から借用したのであろうか。あるいは、二つとも第15三啓経から借用したのであろうか。確かにその可能性も考えられなくはない。二つの詩はいずれも精進を説いた詩であり、内容も似ている。しかし、第15三啓経では二つの詩の置かれた順序が異なる。

三啓経は編集文献であり、そこに含まれる詩の多くは三啓経のオリジナルというわけではない。アシュヴァゴーシャは複数の詩作品を著しているのであるから、三啓経に置かれた『ブッダチャリタ』に一致する詩といえども、地の文を含むような連続詩はさておき、それが一概に『ブッダチャリタ』から取られた詩であるとは断言できないであろう。このことは他の作品にも当てはまるはずで、例えば、阿含を解説したカーヴィヤ調の巨大な詩文集であったと推定される『莊嚴経論』が『ブッダチャリタ』に先行し、アシュヴァゴーシャ自身が『莊嚴経論』の詩を一部使って『ブッダチャリタ』を編んだ可能性もあり得るはずである。

また別の興味深い事実も認められる。『ブッダチャリタ』第26章第60詩に続く第61詩は、『ブッダチャリタ』のチベット語訳から原文を推定すると、文章は異なり、恐らく韻律も

Śālinī ではなく、第60詩と同じ Upajāti であると思われるが、*Mṛtyuvañcanopadeśa* 第4章第93詩に使われた詩と同様に、精進について、木片を摩擦して火を熾す喩えを説く。ヴァーギーシュヴァラキールティが『ブツダチャリタ』から詩を借用するのであれば、意味内容は同じであるから、続く第93詩も同じように『ブツダチャリタ』から借用するのが自然であろう。しかし、なぜか次の詩は『ブツダチャリタ』の詩ではなく、『莊嚴經論』の可能性のある詩である。この事実からすると、ヴァーギーシュヴァラキールティは、『ブツダチャリタ』からではなく、『莊嚴經論』から二つの詩を借用して第4章第92-93詩とした可能性が高いように思われる。真相の程は分からないが、アシュヴァゴーシャ自身の作品についても、『ブツダチャリタ』と同じ詩が、それとは異なる作品、恐らく『莊嚴經論』から取り出され、そのまま『ブツダチャリタ』第26章第60詩としてアシュヴァゴーシャ自身によって組み込まれた可能性があるのではないかと<sup>(34)</sup>。一方でこれが『ブツダチャリタ』の詩であることも確かであるから、本稿のタイトルを変更する必要はないと思う<sup>(35)</sup>。

〈参考文献〉

- Cowell, E. B. 1893. *The Buddha-Karita or Life of Buddha by Asvaghosha*, Oxford, Rep., Amsterdam, 1970.
- Hartmann, Jens-Uwe. 2022. “Trauer um die Großmutter und Trost vom Buddha: Das *Āryikā-sūtra*” *Connecting the Art, Literature, and Religion of South and Central Asia; Studies in Honour of Monika Zin*, ed. Ines Konczak-Nagel, Satomi Hiyama and Astrid Klein, New Delhi, DEV Publishers & Distributors: 153-160.
- **Forthcoming 1.** “Forms of Intertextuality and Lost Sanskrit Verses of the *Buddhacarita*: the *Tridaṇḍaka* and the *Tridaṇḍamālā*.” *Festschrift for Gregory Schopen*.
- **Forthcoming 2.** “A Composite Manuscript from Qizil (SHT 191) and the *Tridaṇḍamālā*.” *Memorial Volume for Professor Duan Qing*.
- Hartmann, Jens-Uwe & Matsuda, Kazunobu. **Forthcoming 1.** “The Case of the Appearing Poet: New Light on Aśvaghōṣa and the *Tridaṇḍamālā*.” *Buddhakṣetrapariśodhana: Festschrift for Paul Harrison*, in *Indica et Tibetica*, ed. Charles DiSimone and Nicholas Witkowski, Marburg.
- **Forthcoming 2.** “Possible Fragments of Aśvaghōṣa’s Lost *Sūtrālaṅkāra* from the “Manuscript Cave” in Šorčuq”, *Festschrift for Eli Franco*.
- Hartmann, Jens-Uwe, Matsuda, Kazunobu & Szántó, Péter-Dániel. 2022. “The Benefit of Cooperation: Recovering the Śokavinodana Ascribed to Aśvaghōṣa”, *Dharmayātrā: Felicitation Volume in Honour of Venerable Tampalawela Dhammaratana*, ed. Mahinda Deegalle, Paris, Nuvis Press: 173–180.
- Hartmann, Jens-Uwe & Maue, Dieter. **Forthcoming.** “Ein sanskrit-ugurisches Fragment der *Tridaṇḍamālā* in Brāhmī-Schrift Reedition des Texts TT VIII D.” *Acta Asiatica Varsoviensia*.
- Hartmann, Jens-Uwe, Wille, Klaus & Zieme, Peter. 2022. “Aśvaghōṣa’s *Buddhacarita* in the Old Uigur Literature.” *Annual Report of The International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University for the Academic Year 2021*, Vol. 25: 173-189.
- Johnston, E. H. 1928. *The Saundarananda of Aśvaghōṣa*, Oxford University Press.
- 1935. *The Buddhacarita: Or, Acts of the Buddha, Part I - Sanskrit Text*, Calcutta, Baptist



Mission Press.

- 1936a. *The Buddhacarita Or, Acts of the Buddha, Part II: Cantos i to xiv translated from the Original Sanskrit Supplemented by the Tibetan Version Together with an Introduction and Notes*, Calcutta, Baptist Mission Press.
- 1936b. “The Buddha’s Mission and last Journey: *Buddhacarita*, xv to xxviii”, *Acta Orientalia*, 15, 1936: 26-111 & 231-292.
- Schneider, Johannes. 2010.** *Vāgīśvarakīrtis Mṛtyuvañcanopadeśa, eine buddhistische Lehrschrift zur Abwehr des Todes*, Österreichische Akademie der Wissenschaften, Wien.
- Weller, F. 1928.** *Das Leben des Buddha von Aśvaghōṣa, Tibetisch und Deutsch*, II, Leipzig.
- 上野牧生 2020** 「第29三啓経（八難経）の梵文テキストと和訳」『仏教学セミナー』111: (21)-(46).
- 2021 「増一阿含の二経典 (1) —— 第30三啓経（五事経）の梵文テキストと和訳——」『大谷学報』101-1: (1)-(28).
- 2022 「増一阿含の二経典 (2) —— 第36三啓経（不堅経）の梵文テキストと和訳——」『大谷学報』102-1: (1)-(16).
- 上野牧生・松田和信 2021** 「アシュヴァゴーシャからヴァスヴァンドゥへ—— 釈軌論と俱舎論に見る馬鳴作品の影響——」『仏教学セミナー』113: (51)-(72).
- 梶山雄一・小林信彦・立川武蔵・御牧克己 1985.** 『ブッダチャリタ』原始仏典第10巻、講談社、1985年。2019年4月に講談社学術文庫2549『完訳ブッダチャリタ』として再刊。
- 松田和信 2019** 「三啓集（*Tridaṇḍamālā*）における勝義空経とブッダチャリタ」『印度学仏教学研究』68-1: 1-11.
- 2020a 「ブッダチャリタ第16章に見られるアートマン批判」『インド論理学研究』12（未刊）。
- 2020b 「ブッダチャリタ第15章「初転法輪」—梵文テキストと和訳—」『佛教大学仏教学会紀要』25: 27-44.
- 2020c 「大智度論におけるアシュヴァゴーシャ—如来十号論に埋め込まれた莊嚴経論—」『印度学仏教学研究』69-1: (53)-(61).
- 2021a 「不浄観を説く中阿含139経—三啓集から回収された梵文テキストと和訳—」『佛教大学仏教学会紀要』26: 63-81.
- 2021b 「大智度論におけるアシュヴァゴーシャ—戒論に埋め込まれた莊嚴経論—」『印度学仏教学研究』70-1: (61)-(69).
- 2022a 「アシュヴァゴーシャ・アンソロジー—鳩摩羅什訳文献に見られる馬鳴の詩作品—」『佛教大学仏教学部論集』106: 19-36.
- 2022b 「出曜経と大智度論共通の馬鳴偈について」『印度学仏教学研究』71-1: (45)-(53).
- 松田和信・出本充代・上野牧生・田中裕成・吹田隆徳 2022** 「毒蛇の喩え—第26三啓経の梵文テキストと和訳—」『佛教大学仏教学会紀要』27: 47-78.
- 2023 「ごみの山に終わる華鬘の喩え—第5三啓経の梵文テキストと和訳—」『佛教大学仏教学会紀要』28: 53-78.

〔注〕

- (1) 未刊・印刷中も多く含まれるが、三啓経と『三啓集』の詳細については、本稿末尾の参考文献一覧に示した筆者の論文および Jens-Uwe Hartmann の論文（筆者との共著論文を含む）を参照していただきたい。さらに上野牧生氏の論文も参照。特に、松田2019、2022a、Hartmann and Matsuda (Forthcoming 1) 参照。
- (2) 7番の1詩は三啓集の2箇所が使われているが、1箇所として数える。
- (3) 2番の58詩は松田2020b、3番の11詩は松田2020a、4番の4詩は松田2019。ただし、松田2020aは未刊。

- (4) 北京大学の段晴 (Duan Qing) 教授追悼論集に寄稿された Hartmann Forthcoming 2 の中で、ハルトマンはすでに17詩の一部を取り上げているが、現時点では未出版。
- (5) 40種の三啓経のうち、現時点では第26三啓経の『毒蛇経』と第5三啓経 (経名不明) のみ全文を公表した。松田・出本・上野・田中・吹田2022, 2023参照。それを見ていただければ、第1ダンダと第3ダンダのアシュヴァゴーシャ作品詩が第2ダンダの阿含經典の解説あるいは讃歎を意図して置かれていることがよく分かるであろう。
- (6) 本稿で提示する梵文テキストと和訳については、本稿の執筆前に独マールブルク大学の出本充代博士に見ていただき、多くの箇所を修正することができた。さらに、8番の33詩については、筑波大学における吉水千鶴子教授主催の研究会 (2022年10月21日) において、その時点で筆者が作成したテキストと和訳を読む機会を持った。研究会には吉水清孝、小野基、志田泰盛、三代舞、須藤龍真の各氏に加えて、同大学の学生院生諸氏も参加され、貴重な指摘を受けた。また広島大学の川村悠人氏からは33詩の後半部に現れる王名について貴重な教示を受けた。該当箇所ではいちいち注記することはしないが、筆者の旧友を含むこれらの方々の指摘と教示を経て、本稿ではより正しいテキストと和訳を提供できたと思う。深く御礼申し上げる。
- (7) 梶山雄一・小林信彦・立川武蔵・御牧克己1985。本稿で提示する50詩は『ブッダチャリタ』第14章、第19章、第20章、第24章、第26章の5つの章に含まれるが、本書には、第14章、第19章、第20章は梶山雄一博士によるチベット語訳からの和訳が、第24章、第26章は御牧克己博士によるチベット語訳からの和訳が収められている。
- (8) 写本は元の文字を消して *te* と上書きしているように見えるが、*'nye* に修正する。「他の者たち」とは、この箇所は五趣の最後の天界に輪廻した者たちを観察することから、他の四趣に輪廻した者たちとは異なる他の者たちの意である。
- (9) ここでは *avekṣita* を形容詞ではなく、名詞として読む。
- (10) 写本には *arttiṃ* と書かれているが、より一般的に用いられる *ārti* に修正した。
- (11) この詩は *Saundarananda* 11.50 と同一である。ただし *Saundarananda* では *pāda c* は *ity ārtā vilapanto 'pi* であり、ヴァリエーションが見られる。ヴァリエーションがあるとはいえ、梵文としてはすでに知られていたわけであるから、50詩ではなく、正確に言うと49詩の梵文原典を本稿で新たに提示することになると書いた方が良くかもしれない。
- (12) Ms. *-vipākabhāgī*.
- (13) Ms. *ghaṭasva-ñ-cittasya*.
- (14) 梶山雄一博士はチベット語訳からこの詩の *pāda d* を「それは自分のためであって、他人のためではありません。」と和訳されている。これはチベット語訳の *pāda d* が *de ni bdag gi don yin gzhan don ma yin no* とあるように、そこに否定辞が入っているからである。これはチベット語の訳者が梵文原典を正しく理解できなかったことに起因しているのかもしれない。
- (15) チベット語訳からのジョンストンの英訳では第34偈とする (Johnston 1936b:96)。
- (16) 写本は *sāntvayaṃ* であるが正規形に修正。名動詞  $\sqrt{sāntv}$  の現在分詞、男性形主格。チベット語訳は *zhi byed* と訳している。Bc 5.74b にも同形が現れる。
- (17) 写本は *kṣeṣṇu* であるが *kṣeṣṇu* に修正した。希な語形の形容詞であるが、*Saundarananda* 12.4 にも現れる。
- (18) Ms. *ato 'niṣṭhikam iṣyate*. 写本ではアヴァグラハが書かれている。
- (19) Ms. *-snāyur mmānsa-*.
- (20) Ms. *vasiṣṭhātrprabhṛtayo*.
- (21) Ms. *prthivīndhātā*.
- (22) 写本では *mahābhogo 'tha nābhogaḥ* と書かれているが、チベット語訳 (*skal ba che dang skal med min*) により修正して読む。
- (23) 御牧克己博士はチベット語訳からこの固有名詞を「クル (Kuru)」とされている。
- (24) Ms. *mahātmānye*.

- (25) 第39-41詩の3詩は全体でひとつの文章を構成している。ただ、第39-40詩に述べられる固有名詞をどのように理解するかは難しい。御牧克己博士はチベット語訳からの第40詩の翻訳を一部放棄されているほどである。第39-40詩の2詩には、意味を異にする同じ発音の語をペアーにして並べる *Lāṭa-anuprāsa* という技法（ハルトマンの教示による）が用いられているが、基本は固有名詞とそれを修飾する形容詞がペアーになって並んでいるように見える。ただし、それだと 40abcd は理解できなくなる。この箇所にはすべて固有名詞が並んでいると見るのが合理的である。パーサ (Bhāsa) の著名な *Pañcarātra* 1. 23 は *Ikṣvāku-Śayyāti-Yayāti-Rāma-Māndhātṛ-Nābhāga-NṛgĀmbarīṣāḥ | ete sakośāḥ puruṣāḥ sarāṣṭrā, naṣṭāḥ śarīraiḥ kratubhir dharante ||* という文章であるが (*Trivandrum Sanskrit Series* 17, 1912:7)、ここには8人の王名が示され、第39-40詩に見られる固有名詞と重なる。これによって、40aの *yayāti* と *śayyāti* が固有名詞であることが確認される。
- (26) 写本には *acyata* と書かれているが修正した。御牧克己博士はチベット語訳からこの箇所を「太陽は〔あるべき〕場所から移り」と和訳されているが、チベット語訳では否定辞が抜けていることによる。チベット語訳にあわせて梵文を修正するには、*acyata* と *āditye* の両語を修正する必要があるが、現時点では筆者には判断できず、本稿では1箇所の修正にとどめて、構文を絶対処格で読む。
- (27) 『三啓集』から回収される詩は第45詩までであるが、『ブッダチャリタ』第24章ではリッチャヴィの人々への教誡はさらに2詩続く。
- (28) 第26章第49詩を『三啓集』に含まれる詩に同定したのは筆者ではなく、筆者とハルトマンの『三啓集』写本解説に協力していただいているハンガリー・ブダペスト大学の Péter-Dániel Szántó である。
- (29) 詩の前半部に置かれるべき関係代名詞が省略されているとみなせば、この詩の構文 (*yaḥ, yo ... tasmai ...*) は簡単に理解される。
- (30) 鳩摩羅什訳の『佛垂般涅槃略説教誡經』（大正389、『佛遺教經』あるいは単に『遺教經』とも）は、『ブッダチャリタ』第26章の第25-88詩が取り出され（恐らく羅什自身によって）、体裁を經典に変えて散文訳されたものであるが、その中で、第60詩は「汝等比丘、若勤精進、則事無難者。是故汝等當勤精進。譬如小水常流、則能穿石。」と訳されている（大正12巻 1111c17-18）。僧侶でもある佛教学部の同僚諸氏の御教示によると、我が国の仏教界でも『遺教經』の訳文を通して、この一文はブッダが精進について説いた教えとして非常に有名で、僧侶であれば恐らく頭に入っているはずの文章だという。たとえば浄土宗の僧侶がみな所持している『蓮門勤行諸經偈要集』（総本山知恩院式衆会刊、昭和48年初版、平成28年修訂版初版）にも『遺教經』の書き下し文が掲載され、この一文は修訂版228-229頁に見える。無論それが經典ではなく、アシュヴァゴーシャの著した『ブッダチャリタ』第26章第60詩の散文訳であるなどと我が国の僧侶に知られていたわけではなかったが、因みに『望月仏教大辞典』の「精進」の項目（2629-2632頁）の冒頭部でも、これが精進を説明する經文として紹介されている。ここに提示した梵文テキストによって、我が国の僧侶たちにも有名な一文のインド語原典が明らかになったことになる。なお、戒を説くアシュヴァゴーシャ作品詩で、羅什の漢訳にかかわる同様の事例は松田2021b:注4参照。
- (31) *Pāda d* が『三啓集』から回収される梵文と異なる。こちらでは、*mṛdu* が中性形で置かれているため、水流ではなく、岩の表面の方を修飾している。意味的には『三啓集』の梵文の方が正しい。筆者は *Mṛtyuvañcanopadeśa* の梵文写本を見ていないため、このヴァリエントが写本自体に起因するのか、校訂者の錯誤によるのか不明。また、*Pāda b* の *ghaṭadhvam* も *yatadhvam* に変わっているが、こちらは意味は同じ。
- (32) 『三啓集』に含まれる詩では、*Pāda d* が *nyāyārabdhāḥ sarvasattvāḥ phalanti*（正しく〔精進を〕開始したすべての衆生は結果を得るのである。）とあり、*Mṛtyuvañcanopadeśa* 4.92とは主語が異なる。この翻訳は松田 2019:7 をそのまま再掲。
- (33) この詩を筆者の1号論文（松田2019）で紹介した時点では、これと同じ詩が *Mṛtyuvañcanopadeśa*

4.93 として現れることに筆者は気づいてはいなかった。それを個人的に指摘してくれたのは拙稿を読んだウィーンの Horst Lasic であった (2020年3月20日付)。彼の指摘は、松田2020c: (60) 注6に記しておいた。さらに指摘を受けて *Mṛtyuvañcanopadeśa* の刊本を入手して全体を一読した時点でも、第4章の先立つ詩 (4.92) が Bc 26.60 であることに筆者は気づいていなかった。筆者がこれに気づいたのはその後しばらく経ってからである。なお、同氏は同じ詩がパーサの *Pratijñāyauḡandharāyaṇa* の第1アンカ末尾に現れることも指摘して下さった。アシュヴァゴーシャ作品の詩が、仏教・非仏教を問わず、当時のインドにおいて人口に膾炙していたことを物語る一例であろう。

- (34) *Mṛtyuvañcanopadeśa* のような後代の文献にまでアシュヴァゴーシャ作品が引用されることと関連すると思うが、11-12世紀に活躍したと思われるスブーティチャンドラ (Subhūtiçandra) の著した『アマラコーシャ (Amarakośa)』注釈書である *Kavikāmadhenu* にも、『莊嚴經論』の原タイトルにも見える *Sūtropadeśālaṃkāra* の書名を挙げて、『三啓集』に含まれる詩が引用され、同じ詩が鳩摩羅什の『大智度論』にも引用されることをすでに筆者は指摘している (松田2020c)。前注にも書いたように、アシュヴァゴーシャ作品、特に『莊嚴經論』に由来すると思われるの詩の数々がインドでは広く行き渡り、相当後代まで伝承されていたことが窺える。
- (35) 本稿で述べた筆者の推測が正しいなら、元は『莊嚴經論』に含まれていた詩が『ブツダチャリタ』や『サウンダラナンダ』の中に他にも多く存在している可能性があることになろう。

(まつだ かずのぶ 仏教学科)

2022年11月15日受理